

ホームページアドレス <http://www1.com.ne.jp/~mizumaki>

発行・カトリック水巻教会
編集・広報委員会
遠賀郡水巻町頃末南1丁目35-3
〒807-0025
TEL 093(201)0680 FAX(201)7354
第317号

門よ扉を開け マヘル神父

夏の名残の暑さと秋を思わせる涼しさが交互に襲い、その上、大型台風の到来。幸い福岡地方はそれでしたが、よそにはかなりの被害をもたらし、10月は大変な月でしたね。

さて先月皆さんと一緒に、共同体のいままでの活動状態を復習しました。神様の恵みが現れてきました。

10月13日ミサ後、私達の教会の門の祝別をしました。その祈りの中で「この門を通る人達の上に、たくさんの恵みが注がれますように」と願いました。「門を入る人達に、イエス様との出会いがありますように。また、教会、共同体との出会い、やすらぎと許し、愛をいただくことができるように。」それを心から願いましょう。

又、もうひとつ大事なことは、私達は、(毎回の)ミサが終わってから派遣の使命を頂きます。その派遣は私達クリスチャンとして大切な責任です。私達の信仰は神からの賜物であると意識すれば、その賜物を他の人にも分け与えることができるでしょう。その派遣の使命を心に留め、教会の門を後にしましょう。

10月20日は「世界宣教の日」でした。献金の協力ありがとうございました。

教皇庁宣教授助事業事務局から次のようなメッセージが届きました。抜粋して紹介します。

教皇フランシスコは、今年の「世界宣教の日」に向けたメッセージの中で、信仰は「わずかな人々のためではなく、惜しみなく与えられている賜物で」あり、「すべての人が、神に愛されているという喜びの経験、救いの喜びを持つことができなくてはなりません。」と述べておられます。そのために、信仰を「独り占め」するのではなく「共に分かち合う」ことが大切だと強調されました。

さらに「福音を述べ伝えるということは、キリストの弟子であるということにすでに含まれていることであり、それは教会の全生命に生気を与える恒久の責務なのです」と述べ、「すべての共同体は、イエスによって使徒に委ねられた使命、すなわち『エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで』イエスの『証人となる』(使徒言行録8:1)ということを問われていて、また自分自身をそのように作り上げるよう招かれているのです」と呼びかけられました。そして最後に昨年の献金の一部はウズベキスタン、トルコ、タンザニアの3カ国に援助され、感謝とこれからの協力願いの言葉が述べられていました。

社会問題に向き合う・・・2・3面
東日本震災・・・4・5面
聖書への案内・・・6面
教会学校・今月の聖人・・・7面
おしらせ・短歌・・・8面

社会問題に向き合うカトリック教会の基本姿勢

No.13 .信徒は、教会から「政治的な」思想を一方的に押しつけられるのでしょうか？

A. 原則として、信徒は社会に関する思想を一方的に押しつけられるところか、教会の考え方の形成に参加します。『教会の社会教説綱要』は、「教会共同体のすべての者（聖職者、修道者、信徒）が、それぞれの異なる役割とカリスマに従って、社会教説の成立に協力するのです」と述べています。当然、政治に関する教会の思想もそこに含まれています。社会の中で信仰や種々の教えを実践していこうとすることにより、信徒にあっては、社会や政治などに関する自分なりの理解が形成されることでしょう。その経験は、小教区や教会活動における分かち合いを通じ、教会共同体に提供することができます。また、教会のさまざまな広報機関などにおいて、自己の経験に基づいた見解を述べることにより、現代世界へのキリスト教信仰のより適切な適用、その方向性の模索に参与することもできます。またそうすることが望まれています。ここで想定されていることは、まず社会教説が直接適用される現場（小教区、さまざまな使徒職や活動、社会における信徒の生活等）レベルでの熟考、そして現場レベルと司教との密接な交流、さらには司教を介しての教皇庁との交流です。この交流によって、現場と教皇庁の間に一種の循環が成立し、互いに補完し合うことにより、社会や政治の問題に関する教会の教えが形成されるのです。

『教会の社会教説綱要』は、社会教説は発展していくものだ述べています。発展とは、社会の変動に伴って、信仰によって

要求される取り組みが変わっていくことを意味しますが、そこにおいてもやはり信徒の経験が重要な参考となります。小教区レベルでの社会や社会問題に関する交流も大切であり、またその交流が司祭や教会のさまざまな組織を通してより広い教会の議論に反映されることが必要です。

そういう意味で、社会教説は決して上から一方的に押しつけられるものではありません。むしろ、教会の指導者と各現場との対話によって豊かになっていくものです。歴史的にみても、現在の社会教説の公式文書の先駆となった回勅『レールム・ノヴァルム』の背景には、産業革命以降の社会に対応する数多くの信徒および信徒の集団の経験と思想の存在があります。信徒のレベルの話し合いが不十分であったり、それが司祭や教会のさまざまな組織や集団を通じて十分に司教団に伝えられなかったりすると、社会教説における不可欠な貢献がおろそかになってしまいます。

ただし、そこには二つの注意が必要です。まずは、いくら対話に参加するものであるとしても、基本的な信仰は守られなければなりませんし、社会教説の新たな発展は今までの発展を踏まえるものでなければなりません。信仰においては揺るぎないものがあり、教会がすでに明確にしていることも多くあります。それを守り、教会が多様な問題に関して述べてきたことを参考にする必要もあります。『教会の社会教説綱要』は

社会教説を遵守することに関して次のように述べています。「社会教説は教会における倫理的な教えの一翼を担っており、その意味において道徳に関する教えと同様の尊厳と権威をもっています。それは真の教導権に基づくものであり、信徒はそれを受け入れ、遵守する義務があります」。

なお、信仰に従い、教会の教えを踏まえたうえで、どのような対策を必要とするのか、あるいはそのためにたとえばどのような政治家や政党を支持すべきかといったことについては、当然信徒一人ひとりが決めることです。『教会の社会教説綱要』は次の

ようにも述べています。「種々の教えの教義としての重要性と、それに対して求められる従順は、教義の本質によって、またどの程度偶発的なことからや変化することからに依存しているかによって、さらに行使される頻度によって決まります」。

二つ目の注意も重要です。信徒が対話に参加するといっても、それが特定の信徒や信徒の集団に特別な影響力を付与するものとなってはいけません。特定の社会階層やイデオロギー集団等が教会に対して特別な力をもつようになることはやはり避ける必要があります。

No.15「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」とイエスは説いています。それこそ政治にかかわるなという政教分離についての教えではないのですか？

A 信教の自由は基本的人権ですから、どの国であろうとも守られるべきものです。しかし、国家と宗教団体との関係は国によって違います。イギリスなど政教一致の国もあれば、フランスのように政教分離の国もあります。それぞれの国の歴史からその関係が作られています。

日本は、明治維新以降、第二次世界大戦終結までの間、国家と国家神道が結びつくことによって、戦争の道を邁進し、国家が仏教、教派神道、キリスト教に介入し弾圧が起りました。そればかりか、植民地化した国も含めて、神社参拝を強要してきました。信教の自由、信条の自由が奪われてきたのです。

こうした歴史的反省から、日本では厳格な政教分離が憲法に規定されました。日本国憲法二十条の定める政教分離とは、特定の宗教団体が国家と結びつくことを禁止するものであり、国家と宗教団体の関係を規定するものです。宗教者を含む個人、あるいは宗教団体が自らの信仰や信念に基づいて、政治的な問

題について発言したり、行動したりすることを妨げるものではありません。

この政教分離という考え方はジョン・ロック(1632～1704年)以降明確になってきて、欧米などに浸透してきました。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」(マルコ12・17 および並行箇所)という福音書のことは、確かに教会の中で「教会と国家」についての教えとして用いられたことはあります。しかし、イエスの生きた時代に政教分離という考え方があったわけではありません。

この福音書のことはさまざまに解釈されていますが、宗教者が政治にかかわるなという意味ではありません。神に徹底して従うことを教えているのです。「二人の主人に仕えることはできない」(マタイ6・24)のです。

むしろ、教会にとっては、神から与えられたいのちや人権を守るために、積極的に発言し行動していくことが、神に徹底して従うことにつながるのです。

東日本震災 各教区ベース常駐で働く方々の姿

三谷 尚

これまで3回、震災被災地支援に行き、米川ベース（南三陸支援、仙台教区が設立）、および原町ベース（南相馬市の特に原発側の小高区支援、東京教区が設立）に赴きましたが、その地で継続的に働く人達はどんな方々なのか、その姿を私の知る限りで、紹介したいと思います。

宮城 米川ベース：ベース長は千葉道生さん（30歳台）で、幸いカトリック新聞に3回も紹介されました。1回目は震災直前で、千葉さんについて、「テゼ共同体」に魅せられての活動が紹介されていました。テゼ共同体はフランスのテゼ村にあり、カトリック、プロテスタント、ギリシャ正教、時には他宗教の若者が揃い、自由に活発な雰囲気の中、祈りの生活を送っているそうです。同共同体はテゼ村の他、世界的な大会を、アジア、アフリカを含む各地で行って、敢えて貧しい人々の暮らしを目の当たりにするそうです。テゼ共同体で人生の大きな飛躍を成し遂げ、フランスを起点に世界的に活躍していた千葉さんに東日本大震災が知らされました。

話は日本に戻りますが、米川（宮城県東北部、海岸から10kmほど内陸）は、千葉さんのお父様の故郷でもあり、東北のキリスト教迫害の地でもあります。私、三谷の親友の父母様は、定年退職後「ここは天国に一番近い場所だ」と語られこの近辺に家を買って住まわれて、私も泊めて頂いたものです。さてテゼにおいて、世界中の若者と共に奉仕の精神を学んでいた千葉さんが、この米川の地の被災支援の長となった事は、日本中から老若男女が集い奉仕を行ってゆくこの事業にとって最高の人選と考えられます。

米川ベースの建物の中にある「テゼの祈りの部屋」、私も目にし、短い祈りの時を持った、たった6畳程度の一部屋。そこでは、シンボルカラーとしてオレンジの光が灯もされる中、テゼの歌として知られる簡単な歌を歌いましたが、この部屋は千葉さんが独断で作ったと謙虚に語られていましたが、思い切って作り、皆の共感を十分に得たものだそうです。なお、私から見た千葉さんは、言葉少ない中に責任感が溢れることが受け取れました。なお私（三谷尚）のこの地への訪問から1ヶ月後に、私の長男も当地にボランティアに行きましたが、誰かに似て、あれこれ人と喋る人間で、千葉さんといろんな話題に花咲いたそうです。

なお、久留米の聖マリア学院大の井手先生をご存知の方もいるかと思いますが、当地ではいわゆるリピーターの様で、同大学の学生を率いつつ重要な役割をされていました。

福島 原町ベース：こちらに2回行きましたが、1回目の時のベース長は池上さん（既婚の女性）でした。家族も持たれ主婦と思われ、非常にご苦労だと思われました。なお、私にとって初めての南相馬、当地に夜、バスで着いた後、ベースはどこだか分からないと、さまよっていた私を車で拾ってくれたのが、やはりベースで働いておられた前田さん（男性）で、

この人については後で話します。

池上さんを考えてみて、継続というものは大変で、常に惨状を目の当たりにする(例えば、ずっと車で寝泊まりしている被災者がいる。その人に、ベースの関係者は寝泊まり場所を提供してよいのか、いけないのか等)心労もあるようで、私が赴いたとき、1ヶ月後には、バトンタッチすると言われていました。

なお、東京教区による震災復興活動は非常に充実し、亘理教会(仙台市南近郊)を拠点とした地域にも及んでいました。ここでは、“ボランティア”と“ベース常駐”の間くらいの、1~2ヶ月程度、(東京の)住居を離れた支援活動をしている、多くの東京教区信徒の青年層の活発な活動を見ました。余談ですが、亘理ともなると、ほぼ私の青年時代の活動地域とも言えるので、東京の青年に、この地の状況を詳しく説明されることに、お株を取られた気もしましたが、嬉しく思いました(笑)。

私の原ノ町行き2回目の時は、ベース長は、シスターの菊池さんという方になっていた様です。1回目のときベースで朝食は提供できない、とは言われ、原ノ町教会で早朝のミサの後に、菓子パンとコーヒーだけと乏しいながら親しみ深い朝食を皆で囲んだのですが、2回目は、ベースで朝食も夕食も頂くことができ、充実しすぎる感じでした。

さて、2回目の原ノ町訪問の私に、1ヶ月前からコンタクトを取って頂いた方、この方は先にも述べた、運転も務められる前田さん(30歳台の男性)でした。私の滞在の後半2日間、ずっとお世話して頂き、最後には2人きりで車で移動して頂き、今の活動に至ったご自身の経緯を詳しく話して頂けましたが、千葉さんと好対照、しかし実に不思議な人間模様を見せて頂きました。



前田さんは名古屋大学の卒業で、卒業後の職業は聞きそびれましたが、この数年間は仏教の禅宗(曹洞宗)において若手僧侶として、精神力と体力がいくらあっても足りない、過酷な修行が強いられ、特に、最後は有名な永平寺での修行をされていたそうです。

そんな中、(千葉さんと同じ文脈になりますが)東日本大震災のニュースが・・・とは言っても、この修業の場では、そんなものは俗世間の話題として片付けられ、このニュースは僅かな伝聞か、ゆがめられた情報として聞かされたと言います。震災のニュースを聞いてしばらくして、ある機に、この仏教修行の世界から「逃亡」したそうです。危うく追っ手がきて捕まるところだったそうですが、「逃亡」して向かった先が、なぜかキリスト教カトリックの原ノ町ベース。今や、最も献身的で、キリスト教の教えにも熱心な彼ですが、これまで、そういう姿だった彼ですから、まだ、洗礼は授かってない。原ノ町教会の神父様から、まだまだだ、と言われているそうです。彼が、できるだけこの地、南相馬に長く居留され、以降の人生が充実したものであることを祈っています。

聖書への案内 No.39 ヨハネの黙示録

非常に難解な書であることで有名ですが、今回、改めて読み返すと難しいことに変わりはありませんでした。この書の内容を分かりづらくしている理由の一つは、時間の設定が混乱していることだと私は思うのです。

神の民が迫害を受けている相手が紀元前六世紀のバビロン帝国だったり、民の救いは主である神であり、またイエスであることが時間的には同列に書いてあるように読めるのです。紀元前六世紀のバビロン捕囚と 560 年後に誕生したイエス様の救いが同列に書いてあるので、気をつけて読まないと混乱してしまう内容になっていると思います。しかし最後は、主の救いを待ち、その救いを賛美しています。

この連載も今回が最後なので、この書についての雑談を読んでもください。

著者については、参考書などを読むと様々な説があるようですが、一番有力な説は、イエスの愛する弟子ヨハネの著作で、表題の通りヨハネがエフェソの沖にあるパトモス島に捉えられていたときに書かれたと言われます。

15 年以上前にトルコに行った時のことです。エフェソの郊外にある「聖母マリアの家」と呼ばれるところに行きました。そこで同行の神父たちと、どうしてこの地に「聖母マリアの家」があるのかという話になりました。

いろいろと話がはずんだのですが、結論として可能性はあるのではないかということになりました。

その理由は二つでした。

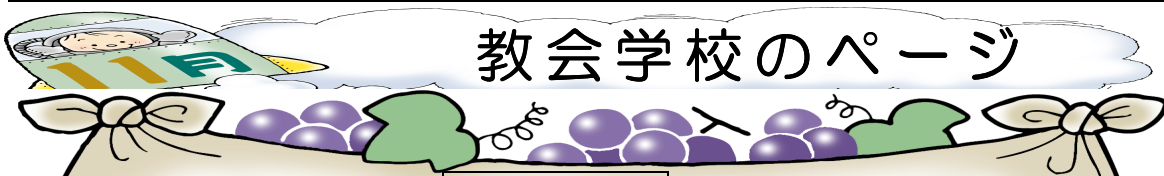
①イエス様は十字架の上から母マリアとそばにいる弟子ヨハネに言われた言葉です。**(ヨハネ 19 章 26・27 節参照)** その後ヨハネは、生涯マリアを連れて各地を放浪したという伝承があるそうです。だからエフェソの沖の島にヨハネがいるのなら、エフェソにマリアの家があるのは不思議ではない。②ヨハネの終焉の地はエフェソであることです。ヨハネはアルテミスの神殿から谷を挟んだ反対側の丘に埋葬されました。ここは今も重要な巡礼地になっています。

この二つの理由から可能性はあるという話になったのです。

一年くらい前に、教会と関係が無い山の会の人から、地中海クルーズの旅に行ったときに「聖母マリアの家」に行ったけれど、どういふところか分からなかったと聞かれました。その時、私は上記の内容を説明したのですが、欧米のキリスト教徒が主体の地中海クルーズでは、ここにも行くのだと初めて知りました。日本人の旅行者のツアーでは絶対に行きません。

今回でこの連載を終わることにします。連載のためにいろいろに参考書を読み、本文も再読することはとても勉強になりましたが、最後は私らしく雑文で終わることにします。

(岩本)



教会学校のページ

10月13日

ルカによる福音17章11節～19節を、各自の聖書を開き、1節ずつ音読しました。

- 重い皮膚病をいやされた事に感謝して、お礼を言いに戻ってきたサマリヤ人のように、「いつも、優しい事やうれしい事をしてもらったら、感謝を忘れないように」と学びました。

新しいお友だち

永山 ふうま 楓海 君

お母様と一緒に、教会学校に出席してくれました。



今月の聖人 **22日 聖セシリアおとめ殉教者** 2-3世紀ごろ

セシリアは、ローマの裕福な貴族の家に生まれた。父の意志により、信者でない青年バレリアノと結婚したが、彼女は、神のために生涯貞潔を守ることを彼に話した。彼女の熱心な信仰態度に心を打たれたバレリアノは、弟ティブルツィオとともに洗礼を受けた。そして彼らは迫害されて殉教した人々の遺体を引き取り、手厚く葬った。このことがローマ総督の耳に入り、バレリアノと弟は捕えられ、信仰を捨てるように命じられたが拒んだため、2人は斬首の刑を受けた。



セシリアは、彼らの遺体を引き取り埋葬した。その後、自分の家をカタコンブ（地下墓地）にしたり、聖堂（のちに聖セシリア教会と呼ばれる）にしたことが総督に知られ、捕えられ、棄教するように強要された。彼女がむし風呂の刑にあっても、苦痛もなく、汗ひとつかかなかったため、最後は首を切りつけられて、3日間の苦しみののち殉教した。

信者たちはセシリアの遺体をカタコンブに葬った。1599年に、腐敗していない彼女の遺体が発見されたといわれている。その姿をもとに、彼女の墓の上には、当時の有名な彫刻家によって造られた像が置かれている。

彼女は、「心のうちで神に音楽を奏でていた」といわれる伝承があることから、音楽家の保護の聖人として人々から親しまれている。



★特別献金★

9月22日 世界難民移住者の日献金

37,900円

ご協力、ありがとうございました。

★サンパウロ会 書籍等販売★

日 時：11月3日(日) ミサ前後

★特別寄付★

中間地区の中田巧様より、教会に寄付がありました。ありがとうございました。

★諸聖人の日★

日時：11月1日(金) 午前9時30分～

★11月は死者の月です★

11月3日のミサの後で、死者の追悼の祈りを行います。色紙や用意してある紙に亡くなられた祈願者の名前を書いて、黒い箱の中に入れてください。

【ご結婚】おめでとう

◇11月10日(日) 11時30分～

宗 友和さん(折尾地区)

小林 恵美さん(中間地区)

今回は結婚式の中でもミサが行われます。お二人のためにお祈りしましょう。

(お詫び)先月号の典礼委員会議事録のページに記載されていた小林恵美さんの名前が間違っていました。申し訳ありませんでした。

